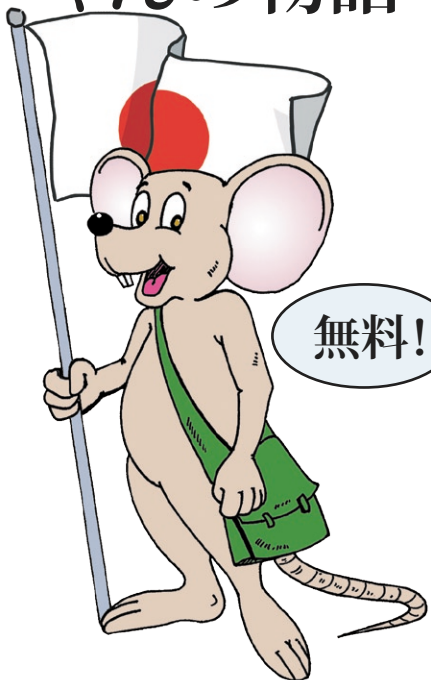


ネズミお兄ち やんの物語



無料!

ラオスの子どもたちに
本を読む喜びを!

ラオス人民民主共和国ルアンパバーン

本の題を「ネズミお兄ちゃんの伝説」ってしちゃだめ？



いいけど・・・
伝説って
ふつう死んだ人の
話じゃない？

ネズミお兄ちゃんの物語 (ເລື່ອງ ອ້າຍໝູ່ນ້ອຍ, ພາສາຍີ່ປຸ່ນ)

ໂດຍ: ສຳນັກພິມ ອ້າຍໝູ່ນ້ອຍ, ຈັດພິມໂດຍ: ສຳນັກພິມ ອ້າຍໝູ່ນ້ອຍ, ຫຼວງພະບາງ. ທະບຽນອະນຸຍາດ: ລຫຍ ____ . ພິມເປັນພາສາຍີ່ປຸ່ນ ຄັ້ງທີ 1 ພິມທີ່ ໂຮງພິມ ດາຕາ ເປເປີ (ປະເທດໄທ) 2014. ຈຳນວນ 5,000ຫົວ

日本語訳はオーストラリアの川崎トランスレーションスタジオの厚意により提供されました。

Big Brother Mouse wishes to thank Kawasaki Translation Studio for donating translation services.

www.kawasakitranslation.com.au



そうなの？
じゃあ物語のほ
うがいいかな。
さあ、始めるよ。



ネズミお兄ち

やんの物語

ラオスの子どもたちに
本を読む喜びを!

ອ້າຍຫນຸ້ນອຍ, ຫຼວງພະບາງ

ルアンパバーンの「ネズミお兄ちゃん」

はじまりはじまり・・・

この物語は、「本を読まない人々」といわれていたラオスの人々が本を愛する人々になったというお話です。

はじまりは1983年のことです。ルアンパバーンから50kmほど離れたコン・カムという村に男の子が生まれ、カムラと名付けられました。八歳で小学校に入ったカムラは、家族の中で字を習った最初の人になりました。

十二歳になったとき、家族はカムラがあんまり勉強熱心で頭が良いのを見て、ルアンパバーンに出て勉強を続けさせることにしました。そこではお寺の小僧さんになって寺子屋で勉強させてもらえるからです。町に通じている道はないので、カムラは船で出発しました。船旅には六時間もかかりました。そしてそれから九ヶ月間も、カムラは家族に会えませんでした。

「始めはとても不安で寂しい気持ちでした。泣いたこともあります」と思い出を語るカムラ。でもすぐにお寺での暮らしに慣れ、楽しい日々を過ごすようになりました。この写真は、観光客が撮ってカムラにくれたものです。

ルアンパバーンにもときおり観光客がやってきました。その人達が、暇な時間に本を読んでいるのを見て、カムラは不思議に思いました。「旅行に来ているのに、どうしてお勉強をしているんだろう？」

その時まで、カムラが見たことのある本といえば、古くて汚くて、読んでも面白くない教科書だけでした。そのころラオ語の本はとても手に入りやすく、カムラがその疑問の答えを見つけるまでには、まだ何年も経たなければなりませんでした。





「ラオ人は本を読まない」

カムラガルアンパバーンまでの長い船旅をしていたちょうどそのころ、サーシャはアメリカで15年間経営していた出版社を手放しました。2003年、サーシャはラオスを訪れました。

もと出版社経営者として、サーシャはラオスの人々がどんな本を読んでいるのかに興味がありました。しかし、彼が見つけた答えは・・・なんにも、でした。「初めてラオスを訪れたとき、訪問中にただの一度も本を目にしませんでした」とサーシャは言います。「私は考えました。何とかして若者に出版の仕事を教え、ためになる本を作ってもらうようにできないだろうか、と。」

けれども、何人かの人に相談してみたところ、異口同音の答えが返ってきました。「ラオ人は本を読まない。」



シポネ

何とかしたいと考えていたサーシャが出会ったのは、当時師範学校の学生で、成功への強い意志を持ったシポネでした。

二人はサーシャがタイから持ってきていた中古コンピューター三台をシポネの借家に備え付け、コンピューター技能を学びたいと願う学生たちに格安料金で貸し始めました。

その時シポネが最初に雇ったのがカムラでした。シポネとカムラは一緒にお寺の小僧をしていて、良い友だちだったのです。

学生たちに人気のあったコンピュータープログラムは英語学習プログラムでした。サーシャは学生たちの英語の練習を手伝うためにちよくちよく出入りしていましたが、そんなときシポネやカムラに出版業のアイデアを語ったのです。

初めての本

その間にも、サーシャは政府の役人や教師、学生らに「本を読むのが楽しくなる本」を出版したいという考えを説いていました。多くの方は本と言えば教科書しか知らなかったのです。本を読むのが楽しいことだなんて思いも寄らないことでした。

そんなわけで、私たち(シポネ、カムラ、サーシャの三人)は、ショップで働きながら協力して五冊の本を書きました。コンピューターを使ってそれぞれ一部ずつ印刷し、見本としました。



シポネが書いたのは、お祖母さんが夜話にしてくれた昔話を本にしました。『瞑想する猫』は、いまでも一番良く読まれている本の一つです。シポネはこのほかにも三冊、とても人気のある本を書いています。



カムラはユーモアたっぷりの詩やマンガを使ってラオ文字のアルファベットを覚える本を書きました。『カエル、ワニ、スイギュウ』はとても広く読まれ、子どもたちの多くがそれを暗記しているほどです。

サーシャが書いたのは、『バンコク・ボブ』という題の、初めて大都会を訪れた子ザルの驚きと喜び(ちょうど同じ状況に置かれたラオスの子どもが体験するような)を描いた本です。



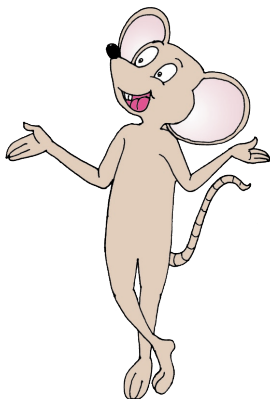
初めての事務所

でも、書いた本を出版することはまだ出来ませんでした。

ラオスでは、本の出版には特別な免許がいります。どんな本もまず政府の検閲に合格しないと出版できないのです。私たちは政府の認可を待つ間にも本を書き続けました。

ビエンチャンで芸術を学んでいるオウンラ(写真左)が多くの本の挿絵を担当しました。トンカム(中央)は翻訳をしました。ここが私たちの最初の「事務所」です。ビエンチャンのゲストハウスの一室を借りていました。ここで、カムラを含めた三人は、私たちの最初のノンフィクション本『アフリカの動物たち』の制作作業を行っています。

あの事務所は
良かったなあ。
トイレまで
付いてたよ!





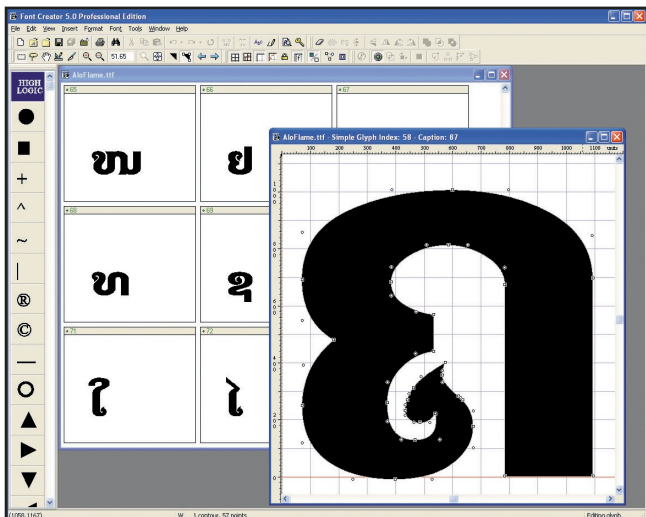
地道な仕事

本の出版を実現するためにしなければならないことはたくさんあります。

挿絵画家ももっとたくさん必要でした。そこで、「子ども文化センター」でコンテストを開くことにしました。入選者の一人、ター・タオは、シポネが書いた『瞑想する猫』の挿絵を描くことになりました。



孤児院の学校で学んでいたセンソンが『ラオスの箴言』コンテストで優勝しました。彼は『ラオスの箴言』の挿絵を担当したほか、もう一人の学生、コンシと一緒に『果物で遊ぼう』の挿絵も描きました。



ラオ文字

ラオスの出版業はまだ未熟で、しなければならないことは山ほどあります。

ラオ語は独特の文字を用います。子音の上か下に母音が表示されます。イントネーション表示は母音の上です。コンピューターでラオ文字を入力する方法はありますが、デスクトップパブリッシングソフトはうまく対応できませんでした。

そこで、私たちは自分でフォントとシステムをデザインしなければなりませんでした。(これらのフォントとシステム、使用説明書が当社ウェブサイトの“Special Projects”のページに公開されています。)

ຈາກນິຕໂສຍໂອວາດ ບໍ່ສັງຄວາມຄິຂອງ ສຽງ ເມື່ອຊື່ວ່າ
ຄົນເປັນພະຍາມີກໍ່ບໍ່ມີໂອນວາດຕະເວີດຈາກຄື ຕິດສິນໂຂດ
ກໍ່ຂອງຊື່ຄົນຕາມຈິນັກ ຂຶ້ນດີທິນະສິກຊິນວາຍ.



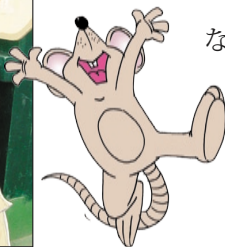
新しい仲間

14才でコンテストに優勝したチッタコネは、自分のスイギュウにいろいろな装置を取り付けたいと考えた少年のお話『改良水牛』の挿絵を描きました。その後も『ドリトル先生物語』など、何冊かの本の挿絵を担当しながら、いろいろな技法を習得していきました。

そうして16才の時から二年間かけて自分で絵も文も書いた大作が『素晴らしいところ、恐ろしいところ』です。モーリス・センダックの名作『かいじゅうたちのいるところ』にヒントを得たこの本は、わるさをした男の子が自分の部屋に入れられ、ファンタジーの世界に行くというお話です。



お兄ちゃんネズミ誕生



面白く
なってきた!

2006年の6月、いろんな事がいっぺんに起こりました。まずカムラが師範学校を卒業しました。さらに事業を設立する免許も取得(「お兄ちゃんネズミ」はラオ人が所有する非営利団体として設立されています。)次いで出版免許の申請を行いました。

この手続は非常に面倒なものでした。ルアンパバーン役所は、それまでに一度も出版免許を発行したことがありませんでした。現在でも、私たちは首都以外で同免許を保有している唯一の団体です。

同じ月、私たちは大きなネズミの絵が描かれた新しい店舗をオープンしました。それまでに書かれた六冊の本が並べられたショーウィンドウにカムラは誇らしげな看板を掲げました——「本屋」。無理もありません。私たちは北部ラオスのどの店よりも多いラオ語の本の品揃えを誇っていたのですから。



本の読み聞かせは近所の子どもたちに大人気です。

子どもたち一人一人に本を与え、読み終わったら他の子と交換できる「回し読み箱」を設置。



この「回し読み箱」は好評で、子どもたちは本を読むのが楽しいことだと気づき始めました。箱には、私たちの本だけでなく、ビエンチャンで見つけた本も入れておきました。

でも二週間もすると飽きられてしまいました。子どもたちはみんな、全部の本を二回は読んでしまっていたからです！



子どもたちに本を

2006年末までに、15冊の本が出版されました。次の課題はどうやってそれを子どもたちに届けるかです。

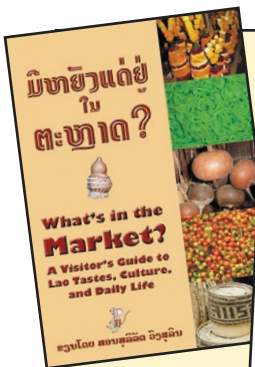
ルアンパバーン郊外のノンサアット村で、ソネスリラットがブックパーティーを開きました。本人も知らなかったことですが、これはラオスで最初のブックパーティーでした。

翌月もパーティー、そしてその翌月も…。2007年に彼は31回のパーティーを開きました。そして2012年にはなんと903回ものパーティーが開かれました。

ソネ

最初にブックパーティーを開いたとき16才だったソネスリラット(略してソネ)は、「お兄ちゃんネズミ」と一緒に大きくなりました。今では、25人を束ねるリーダーです。5人ずつ5チームに分かれて学校を訪れ、子どもたちに本を読む楽しさを学ばせ、本を与えてくるのが仕事です。

彼の作った読書をテーマにした歌はブックパーティーでいつも人気で、子どもたちは喜んでそれを歌います。その他にも本を五冊書いています。



中でも特に人気なのは『市場で見つけたよ』という題の市場で売っている食べ物や日用品を紹介する本です。

ブック パーティー



グッド
アイデア!

ブックパーティーは本を読者に届ける一番の方法になりつつありました。最近、やり方を大きく変更しましたが、重要な手段であることは今も変わりません。



まずは目的地に着かなければなりません。車や船に乗っていますが、時には「ブーンブーン」の背も借ります。

本について話し、読み聞かせします。読み聞かせというものを初めて知る子どもたちがほとんどです。



気分を変えて
屋外でゲーム。
私たちのスタッ
フは二十種類
もの様々なゲ
ームを用意し
ています。

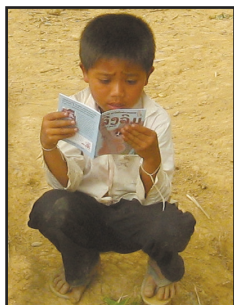


本について教
える歌を歌っ
たり、本を扱
うときの注意
事項を学んだ
りします。「雨
の中に置き去
りはだめ!」

それから好き
な本を選びま
す。ほとん
どの子は本を
手にするのは
これが初めて
です。



私たちはその後も様々な種類の本を上梓しました。



『ラオスの動物たち』や楽しい言葉遊びの本、



ラオスの昔話から『ピーターラビットの本』まで。

ブックパーティーと本の出版が続きます。

2007年の終わりには、子どもたちが全部読み尽くしてしまふまでに一ヶ月を要するぐらいまで蔵書が増えました。



英会話教室

そのころ、ショップで新しい試みが始まりました。英語会話教室です。

ルアンパバーンには英語を習いたいという若者がたくさんいます。また、その手助けをしたいという旅行者にも事欠きません。

ショップで毎日二回(朝9～11時と夜5～7時)に二つのグループが集まって会話の練習をすることにしました。

教えた経験は問いません。訛りのある英語でもかまいません。むしろ若者たちにとっては、どんな訛りの英語でも理解できることはプラスになります。この教室に二、三年通った若者は、大学で英語を勉強した人よりも上手に話せるようになります。



新しい作家たち

若くて才能のある挿絵画家を見つけることはそう難しくありませんが、作家を発掘するのはずっとたいへんです。無理もありません。良い本を読んだことのある人がほとんどいない国で、どうやって良い本の書き方を習えというのでしょうか。

字を覚えてたての子どもに読ませる短いやさしい本が必要でした。子どもが初めて出会う本には、繰り返しが多くてわかりやすく、1ページにつき1文、楽しいエンディングのある本が向いています。

意外なことには、本を書きたいという人の入門としてもそのような本は最適でした。カムラという名の若い女性は、私たちの店で働き始めたとき、まったく物を書いた経験がありませんでした。けれども何度かのワークショップを経てカムラは『腹ぺこガエル』というお話を書きました。そのカエルはバッタを食べ、コオロギを食べ、ミミズを食べて、それでもまだお腹が空いていました。

そのときカエルはおなかを空かせたへびに会います……。結末はお話しできませんが、私たちはみんな(たぶんカエル本人を除いて)、それはとても愉快的な本だと思いました。

新たな作家、新たな本

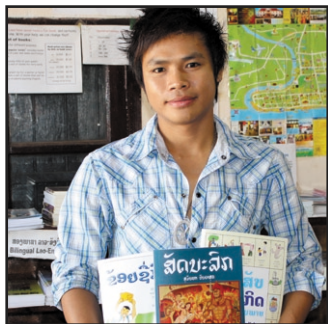
事業が大きくなると共に、職員の数も増えました。そのうちの何人かを御紹介します。



無料英会話教室で英語を習っていたジェームズは、高校卒業後私たちの店でパートタイムで働き始めました。彼が自身のフモン村での生い立ちを描いた本は、当社ウェブサイトから無料でダウンロードできます。



ヴィソネははじめ厨房で働いていましたが、英語やその他の技能を習ってお店のスタッフになりました。すでに初級者向けのやさしくて楽しい本を三冊書いています。



リンクは本のデザイナーであり、自身も仏教文化を伝える説話集など、何冊かの本を書いています。



ノラは事務所の切り盛りをしています。彼女も花についての本を書いており、今はラオスの伝統料理に関する本を執筆中です。



ブックパーティースタッフのデュアンディ(上の写真)とソネは、初心者向けの本を書いています。



コンシがラオスの人々や文化を撮った美しい写真の数々が私たちの本の多くを彩っています。

本への愛情を広める

私たちは、人々に読みたいという熱意を起こさせるような良質の本を作って、特に農村部の子どもたちに本好きの子になってもらいたいと願っています。

これまで、ラオスでは本は珍しい物でした。子どもたちが本に触れられるような機会は限られていました。私たちはブックパーティーを始めとして様々な方法で農村部の子どもたちに本を読む喜びを伝えています。



本の大使

キットは私たちが無料で実施している読み聞かせワークショップに参加して、本の読み聞かせを学びました。

文庫

ヴァナリーは自分の村で文庫を開いており、「ネズミお兄ちゃん」を通じて他の人の手助けをしています。





訪問

ある農村にて、ソネが『昔ながらのおもちや』を見せながら遊びのアイデアを話し合っています。

「やってみよう」の会

子どもたちは手を動かしながら学びます。やってみる多くの多くは本から来ています。



教育

ラオスの先生たちの多くは自身が本に恵まれない環境で育ちました。2013年には500人の先生たちに教室でどのように本を用いればよいか教えました。

成果

今や、各地の農村で本を読む子どもの姿を見かけるようになりました。私たちの活動の成果は海外でも注目されています。



2008年香港にて、ビル・クリントン氏のクリントン・グローバル・イニシャティブより特別表彰を受けました。

ブックパーティーが終わり、家に帰る時間です。でも子どもたちは、本当はもっと本を読んでいたいたい……。





ボウンティエンさん
(ホウイヴァエン学
校教師):「ネズミお兄
ちゃんくれた本で
子どもたちは学ぶこ
との楽しさを知りまし
た。家庭のことでくよ
くよ悩まなくなりました。
欠席も少なくなりました。」

ジャンタちゃん、9才(写真):「時間
があるときは本が読みたいです。お
友達と一緒に読むのも好きです。毎
週先生に新しい本と替えてもらっ
て、弟に読んであげます。」

ボウミーさん(学生):「もっとたくさ
ん本が読みたいです。だって楽し
いから。今まで自分の本を持ったこ
とがありませんでした。今、『改良水
牛』と『バッタ戦争』、『瞑想する猫』
を読み終わったところです。」





ນົກກຳລັງສັບກິນສາລົ.
The bird is pecking at the corn.



ແບກ, ຫາບ, ເຈ້ຍ, ຫອບ,
ອັ່ມ, ເປ້, ຄາບ

ひとこと絵本

単語は読めても文章が読めない子どもにも本を読む喜びを教えられますか？ …私たちはできていると思っています。

二年生になっても文章を読むのが苦手な子もいます。文字は全部知っているのですが、本を読む機会が限られているために、文の最後まで読んだときには最初の単語を忘れてしまっているのです。

そのような子どもたちにも、読むことが楽しいと思えるような本を作りました。私たちはそのような本を、冗談交じりに「ひとこと絵本」と読んでいます。

ボウンヤンが書いた『食べる』。色鮮やかな写真がたくさんあり、単語や短い文しか読めなくても楽しめます。大きい子どもたちは英語の教科書としても使えます。

『何してる?』は、それぞれの絵にあった単語を選んで遊びます。読みの練習になるばかりでなく、単語の使い分けも身に付きます。親たちからも子どもと一緒に読むのに最適と人気があります。



私たちの願いは

ラオスが本を愛する国になること

2013年、私たちの活動が大きく変わりました。

ブックパーティーを開く度に、各教室に50冊の本を置いてきます。すべての生徒が自分の選んだ本をもらえます。

先生たちは、ブックパーティーの後は子どもたちの読む力が向上し、出席率が上がり、授業にも積極的になったと言っています。毎日読書の時間を作っている教室ではその効果はさらに目覚ましくなっています。

ネズミお兄ちゃんが生まれた2006年頃は、「ラオ人は本を読まない」とよく言われたものでした。そしてそれは事実でした。

でも、ラオスのごく短い期間に「本を愛する国」に変貌しようとしています。そしてそれは教育水準の向上に直結します。ラオスの経験は教育水準の向上に頭を悩ませる近隣諸国の模範となるでしょう。

この事業に力を貸して下さいませんか？



すべての子どもに本を

私たちに共感して下さる多くの人々のご支援により、今までに15万人の子どもたちが、生まれて初めて本を手にすることができました。

私たちは、すべての子どもに本を与えたいと望んでいます。この事業に力を貸して下さいますか？

- 350ドルの御寄付で、農村部の小学校に読書プログラムを設立することができます。私たちが訪問してブックパーティーを開き、各児童に好きな本を与えます。それから各教室に50冊の本を設置して毎日の読書プログラムを開始します。御寄付を頂いた方には、ブックパーティーの後、写真とレポートをお送りします。
- 1000ドルの御寄付で、新しい本のスポンサーになっていただけます。ウェブサイトから、お好きなタイトルをお選び下さい。

本当に意味のある贈り物：本のスポンサーシップは、大切な方への贈り物としても最適です。特に、その方が愛書家ならばなおさらです。

他にも、僕を助ける方法はいろいろあるよ！
このパンフレットを見かけた場所（レストランや宿泊施設など）に、この本が気に入ったとひと声かけてね！



まだまだお話
したいことが
たくさんあるん
だけど・・・



あとはウェブサイトで!

ウェブサイトには次のような内容が記載されています。(カッコ内はページタイトル)

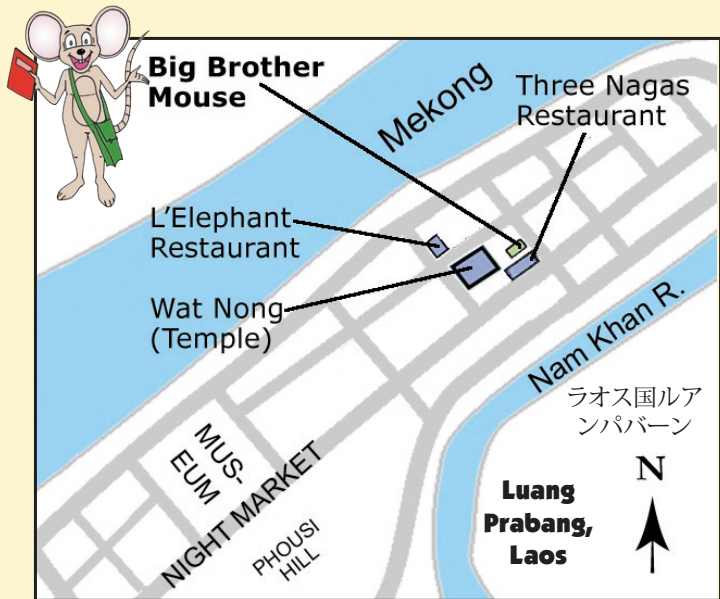
- ラオス農村部で開かれている1000回以上のブックパーティーの写真記録。(Photo Album)
- ブックパーティーや学校読書プログラムのスポンサーになる方法(ホームページからリンク)
- 定期報告書郵送申込 (Contact Us)
- スポンサーを探している本の一覧 (Donate)
- 学校の先生方の証言 (About Us)
- 「ネズミお兄ちゃん」に関わっている作家、画家、職員についての情報。(About Us)
- ラオ文化についてもっと知る (FAQS)

www.BigBrotherMouse.com

「ネズミお兄ちゃん」は、ほんとに伝説になったみたいだね!



まだまだよ!最後まで読んでね!



「ネズミお兄ちゃん」ではいろいろなことができます。

- 熱心なラオの生徒たちに英語を教える。
- 『市場で見つけたよ』などの本を読んでラオス訪問をもっと楽しむ。
- ラオス農村部の子どもたちに初めて本に触れる機会を提供する。
- ラオスの友人へのプレゼント、世界の友人へのお土産を買う。

是非、お立ち寄り下さい! 毎日営業、午前8時から午後7時まで。

ອ້າຍໝູ່ນ້ອຍ 0318

